

## メアリ・フェノロサの「合作」疑惑

## ——『トゥルース・デクスター』の評価をめぐる——

伊藤 豊

(文化システム専攻欧米文化領域担当)

## はじめに

メアリ・マクニール・フェノロサ (Mary McNeil FENOLLOSA, 1865-1954) は、夫であるアーネスト・フランシスコ・フェノロサ (Ernest Francisco FENOLLOSA, 1853-1908) に比して、日本ではそれほど知られた存在ではあるまい。フェノロサは1878 (明治11) 年に、まず御雇外国人教師として来日し、のちには日本美術復興の立役者として活躍する。アメリカに帰国後、フェノロサはボストン美術館東洋部でキュレーターとして勤務し、そこで助手メアリと恋に落ちる。彼は最初の妻と離婚直後の1895年末に、ニューヨークでメアリと入籍を果たすのだが、メアリも初婚ではなく、彼女にとってこの度の結婚は、最初の夫に死別し二度目の夫との離婚を経た3度目のものであった。

夫フェノロサがおもに日本美術の分野で記憶される人物であるのに対して、メアリは詩人そして小説家として、大物とは言えないにせよアメリカ文学史にその名をとどめている。ただし日本においては、メアリはあくまでも日本美術復興の功労者フェノロサの妻として語られるのが常である。要するに日本での主役は、あくまで夫フェノロサでありメアリではなかったわけだが、一方で彼らと同時代のアメリカへと目を転じれば、実のところメアリの文名は夫のそれをしばしば凌駕していた。とくに1906年に出版された、メアリの3作目の小説『竜の絵師 (The Dragon Painter)』は、発売当初から好調な売れ行きを博し、メアリは作家として確立した名声を手に入れる。一方で同時期のフェノロサの活動を追ってみれば、巡業講演によってそこその人気は獲得した反面、たとえ

ば『竜の絵師』が出版されて以降の新聞紙上で、「フェノロサ」という名が登場する際は、それはほとんどメアリのことであり、また記事の扱いも夫より概して大きかったことは否定できない。

ただし作家メアリの名が世に知られてくると同時に、彼女の作品は実のところ夫フェノロサとの「合作」なのではという噂が、しばしば囁かれるようになる。この噂は必ずしも事実無根とは言えない。例えばメアリの日記を見れば、彼女は小説家としての処女作である『トゥルース・デクスター (Truth Dexter)』(1901年)の執筆中に、折に触れてその原稿をフェノロサに読み聞かせ意見を求めていることが伺えるし、<sup>(1)</sup> また後に紹介するように、フェノロサの筆になる部分を原稿の中へと直接取り込んだことも、日記に記録されている。

しかしながら、こうしたフェノロサの協力がメアリの執筆中にあったとはいえ、彼女が主導権を握りつつ作品全体を自分の文章として構成し書いている以上、「合作」という言い方はメアリに酷な(一方でフェノロサに対しては過大な)評価ではないかと、私には思われる。本稿で論じるように、小説家としてのメアリのオリジナリティを損なうような形で、フェノロサとの「合作」がおこなわれた形跡はなく、彼の貢献は作品のエンリッチメントにとどまっていたようにしか見えない。

にもかかわらず、メアリの小説を書いているのが実は夫のフェノロサではないかという否定的な評価は、当時の読者の間で抜き難く存在していた。本稿ではメアリに対するそうした評価の淵源と当否について、処女作『トゥルース・デクスター』

(1) Mary McNeil Fenollosa's diary, 13 January 1899. Museum of Mobile, Ala.

の原文と照らし合わせつつ論じ、またその影響についても検討したい。

### シドニー・マコール——謎の作家

メアリは小説家としてのデビュー作『トゥルース・デクスター』と、2作目の『神々の息吹 (The Breaths of Gods)』(1905年)を、シドニー・マコール (Sidney McCall) のペン・ネームで物している。彼女の3作目『竜の絵師』は、雑誌『コリアーズ (The Collier's)』主催の小説コンテストへの応募作であり、メアリはこの応募の時点では本名を用いていた。『竜の絵師』はめでたく入賞を果たし、翌年に増補版が単行本として出版される運びとなったのだが、その直前に出版社(前の2作品と同じくリトル・ブラウン社 [Little Brown and Co.] が担当)は、マコールが実はメアリであると公表する。小説家としてのメアリの名は、1906年10月出版の『竜の絵師』の初版において、“Author of ‘Truth Dexter,’ ‘The Breath of the Gods,’ ‘Out of the Nest: A Flight of Verses,’ etc.”という形で、マコールによる過去の作品と併記して現れており、マコール=メアリ・フェノロサという認識が読者の間で定着するのは、『竜の絵師』が出版されて以降のことだと言っていいただろう。

『トゥルース・デクスター』のヒットに伴い、作者マコールに対する人々の関心も高まりを見せていった。マーク・トウェインは自身の誕生日パーティーに、この謎の作家を招待したが、出版社との約定によって正体を隠さなければならなかったメアリはこれを断り、マコールとは何者かという読者の疑念は、いっそうかきたてられることとなった。<sup>(2)</sup> かつてメアリが暮らした都市であり、また作品の出版元のリトル・ブラウン社があるボスト

ンにおいては、マコールがメアリと同一人物であることは、一部の人々の間ではすでに知られていたようだが、<sup>(3)</sup> ニューヨークなど他の地域では、その正体は依然として謎のままであった。

### 先妻による暴露

マコールの正体を公の場で暴いた資料的に確認できる最初の人物は、フェノロサの先妻リジーである。1901年11月の『ニューヨーク・タイムズ』には、「『トゥルース・デクスター』を書いたのは誰か」という題名の、以下のような記事が掲載されている。

WHO WROTE “TRUTH DEXTER”?  
A Collaboration of Miss Scott and  
Ernest Fenollosa of Boston,  
Latter’s Divorced Wife Says.  
*Special to The New York Times.*

BOSTON, Mass. Nov. 17. “Truth Dexter,” the new novel of American life, is, according to the divorced wife of Ernest Fenollosa, formerly of the Boston Art Museum, a work of collaboration by Mr. Fenollosa and May Ledyard [sic] Scott of Mobile, Ala., who was the co-respondent in the divorce proceedings.

Ponkatuck Island, mentioned in the book, is owned by a well-known Boston man. It boasts of a Government life saving station, and absolutely no woman has ever set foot upon it since its private ownership, to which period the description in the book relates. Senator Henry Cabot Lodge is a frequent guest of the owner, and from a knowledge of this circumstances undoubtedly arose the story that the Senator wrote the book. This Mr. Lodge emphatically

(2) “Under the name of Sidney McCall, she became known as the author of ‘Truth Dexter,’ and because of a promise to her publishers to remain a mystery she was obliged to refuse an invitation sent to Mr. Sidney McCall for Mark Train’s birthday-dinner...” (“Town & Country Calendar,” *Town & Country*, 9 November 1907).

(3) 註15の引用文を参照のこと。

denied, saying at the same time that he had never seen the book.

Mrs. Fenollosa says that the description of the private island are [sic] exactly as her husband gave them to her in frequent conversations. Quoting from page 187 of the book the words, “An imbricate roof of Japanese Ivy,” she says that she never heard a human being use the expression but Mr. Fenollosa, with whom it was a great favorite. At about the same place in the book Timothy Pickering is mentioned. Mrs. Fenollosa’s maiden name was Pickering, and the description and circumstances connected with the mention of the name were those that she and her former husband often talked about. They could have emanated only from his pen, she says.

Again the book refers to “Bryan’s Tatterdemalion Legions,” another of Fenollosa’s stock phrases. On page 199 is a description of wet pebbles and of quartz of various colors. It was Fenollosa’s habit to bring home from his outings a pocket full of just such stones and to say: “They are dead in my hand, but just imagine an entire beach of them.” On page 206 is a discussion of the triple alliance. This subject was his hobby.<sup>(4)</sup>

上の引用部にある「フェノロサ夫人」とは、先妻リジーのことである。リジーは1895年に離婚後も、前夫の姓であるフェノロサを名乗り続けたが、アメリカの婚姻制度からすれば、これ自体は別に異例なことではない。むしろ見逃せないのは、

離婚から6年が経過し、相手もすでに再婚して久しいこの時期ですら、リジーがメアリのことを「アラバマのメアリ・レイナード・スコット」と、依然として呼んでいる点である。さらに本記事の見出しにある“Miss Scott”という表現について言えば、すでにフェノロサと再婚して相当期間がたつメアリを、新聞記者があえて「ミス」を付けて旧姓で呼ぶ必要はなかつただろう。つまり「ミス・スコット」とは、リジー自身による表現であったことが伺える。

このような事情からすれば、リジーが「フェノロサ婦人」を自称し続けたことには、単なる慣習以上の感情的な事情が推察される。要するにリジーの心の中では、メアリは依然としてかつての夫の不貞の相手であり、ゆえに「ミス・スコット」だったのである。

#### 『トゥルース・デクスター』と「合作」の問題

『トゥルース・デクスター』はタイトルと同名の南部出身の年若い純朴な女性を、いちおう主人公とする物語なのだが、トゥルース以上に話の実質的な中心人物となっているのは、ボストンでやり手の弁護士として知られるヴァン・クレイグヘッドであり、また彼が以前から近い間柄にあったオーキッド・ウィリー婦人である。オーキッドは夫がありながらも、独身だったクレイグヘッドに恋心を寄せており、自分との仲を絶って南部滞在中に突然結婚したクレイグヘッドはもちろん、その妻となったトゥルースも許せず、機会あるごとにクレイグヘッドを誘惑し、また自分と彼の関係が続いていることをトゥルースに匂わせて、二人の間を裂こうとする。典型的なメンドクセ～系の悪女とイノセントな小娘の間で、クレイグヘッドの心も大揺れに揺れるわけだが、すったもんだの拳句にトゥルースの妊娠が発覚し、話は彼女の出産とともに大団円を迎える。

『トゥルース・デクスター』の粗筋は以上のようなものだが、メアリの小説家人生のいわば起点

(4) “WHO WROTE ‘TRUTH DEXTER’? A Collaboration of Miss Scott and Ernest Fenollosa of Boston, Latter’s Divorced Wife Says,” *New York Times*, 18 November 1901.

に存するこの作品を、リジーは上の記事の中で「フェノロサ氏との合作 (collaboration)」であると述べる。ただし読み進んでいくと、「合作」というのが一種の婉曲表現だということが分かってくる。リジーの主張によれば、『トゥルース・デクスター』に見られるいくつかの表現はフェノロサ独特のものであり、ゆえに「彼の筆によるもの以外ではありえない (“They could have emanated only from his pen...”)」。要するにメアリの力のみで『トゥルース・デクスター』が書けたはずもなく、そこにはフェノロサによる直接的な手が相当入っていると、リジーは断じているわけである。

「ミス・スコット」に対するリジーの悪意は、上の引用から容易に読み取ることができよう。であるにせよ、何しろリジーはフェノロサと17年をともに過ごした先妻であり、彼女がフェノロサの筆致を熟知していたとしても、確かに不思議はない。以下では、『トゥルース・デクスター』を「合作」と言い切るリジーがその根拠として指摘する点をまとめつつ、若干の解説を加えてみたい。

#### 「合作」の証拠(1)：ポンカタック島の問題

『トゥルース・デクスター』に出てくるポンカタック島 (Ponkatuck Island) の描写は、メアリ単独では不可能であると、リジーは述べる。「ボストンの著名な男性」の個人所有地である同島は、女性の上陸を許しておらず、したがってメアリがその具体的な光景を知り得るわけもない。メアリの描いた光景は、フェノロサがかつてリジーに語った内容とも完全に合致しており (“Mrs. Fenollosa says that the description of the private island [is] exactly as her husband gave them to her in frequent conversations.”)、したがって情報源はフェノロサに違いないというのが、リジーの主張である。

「ポンカタック島」については、少し解説が必要だろう。上の記事では同島が実在のもののように扱われているが、実際にはこういう名前の島は

ない。しかし『トゥルース・デクスター』の中には、“The island of Ponkatuck lay but a mere speck to the southeast, in the very track of vessels bound for Boston and Portland.”という記述があり、さらには“Now swinging into the teeth of a rising wind, the ‘Burlington’ cut angles of flying foam from the rushing tide that has severed Ponkatuck from Nantucket’s western cape...”という、ナンタケット島 (以下に述べるように、この島は実在する) との位置関係を示す説明もある。<sup>(5)</sup> これら2つの点から、ポンカタック島のモデルとなったのは、おそらくはタッカーナック島 (Tuckernuck あるいは Tuckanuck と表記される) であったと想像できる。

マサチューセッツ州南東のナンタケット島の、さらに西隣に位置するタッカーナック島には、当時のボストン社交界であまねく名を知られた教養人で、日本時代からフェノロサと親しかったウィリアム・S・ビゲロー (William Sturgis BIGELOW, 1850-1926) の別荘があった。ビゲローは親しい友人たちを招いて、夏をタッカーナック島で過ごすのが常であったが、以下の引用が伝えるように、そこでの生活スタイルはかなり特異なことで知られていた。

At his favorite spot in America...a summer house on tiny Tuckernuck Island, off the shores of Nantucket, he entertained men only, and his guests wore pajamas, or nothing at all, until dinnertime, when formal dress was required.<sup>(6)</sup>

#### 男性のみが客となることを許されたという記述

(5) Sidney McCall, *Truth Dexter* (1901, reprint, Boston: Little, Brown, and Company, 1906): 180, 197. なお本稿の議論には1906年版を用いているので、註4の記事で挙げられた頁数とは、引用などの際にズレが生じていることを、注記しておく。

(6) Curtis Prout, “Vita: William Sturgis Bigelow. Brief Life of an Idiosyncratic Brahmin: 1850-1926,” *Harvard Magazine*, September-October 1997 (Internet, <http://harvardmagazine.com/1997/09/vita.html>).

は、先に引用したリジーの指摘とも合致しており、ポンカタック島のモデルがタッカーナック島であることを示していると言えよう。さらには以下の引用に見られるように、マサチューセッツ選出の上院議員であったH・C・ロッジ (Henry Cabot LODGE, 1850-1924) は、タッカーナック島において最も頻繁にビゲローの客となった人物の一人であり、これもまた冒頭に挙げたリジーの証言を伝える記事の内容 (“Senator Henry Cabot Lodge is a frequent guest of the owner....”) を裏づけるものとなっている。

Dr. Bigelow spent his summers on the Island of Tuckernuck, the western half of which had been bought by his father.... He lived there in a manner which combined primitive life and luxury, and attracted to him a close coterie of friends, among whom were Edward W. Hooper, Henry Cabot Lodge, Drs. H. P. Walcott, and F. C. Shattuck. Other intimate friends were Theodore Roosevelt and Henry and Brooks Adams.<sup>(7)</sup>

『トゥルース・デクスター』の中では、“The island was owned, entire, by Mr. Thomas C. Wiley, with the exception of a tiny corner reserved for the lighthouse service, and the life-saving station.”<sup>(8)</sup> という記述にあるように、ポンカタック島全体が一部を除き私有地であると設定されているが、これは上の引用に見られるように、タッカーナック島の多くの部分がビゲローの所有であった事実と符合する。また『トゥルース・デクスター』の他の部分では、灯台や海難救助施

設など、実際にタッカーナック島に存在していたものがストーリーの中に取り込まれており、ここからポンカタック島のモデルとなったのがタッカーナック島であることは、同地を多少なりとも知る者なら一読して想像できるものであった。

フェノロサがタッカーナック島を訪れていたとするならば、彼がボストン美術館に在任していた頃、当時蜜月関係にあったビゲローの別荘へと招待されたのだろう。ただしフェノロサが同島に行ったことを示す記録や文献を、私は発見していない。したがってポンカタック島の情景描写がフェノロサから出たものであるというリジーの主張は、可能性としては全否定できないものの、現時点では客観的な裏付けを欠く話にとどまっている。

### 「合作」の証拠 (2) : ピッカリングの暗示するもの

リジーは『トゥルース・デクスター』において、ティモシー・ピッカリングという名が用いられていることを問題にしている。ピッカリングの名が登場する部分は、小説の筋の上では特に重要でもない。ポンカタック島の邸宅の、蔦棚の下にあるベランダで、長椅子に横たわっているオーキッドを、クレイグヘッドが見つかる場面 (“She was lying on an old East Indian wicker chair, such as Tom’s grandfather used to bring over in his patient barks to Timothy Pickering’s Salem, propped with cushions, and waving carelessly a huge round fan of plaited green and orange straw.”<sup>(9)</sup>) であり、言うなれば単なる小道具的な用法に過ぎないのだが、リジーによれば、上に登場する「ティモシー・ピッカリング」なる人物名も、フェノロサの発案に由来するもの以外ではあり得ないという。ここで根拠として挙げられるのは、フェノロサと結婚する前のリジーの旧姓がピッカリングであったということ、ならびにピッカリングという名前が現れる部分の記

(7) W. T. Councilman, “William Sturgis Bigelow: 1850-1926,” M. A. De Wolfe Howe, ed., *Later Years of the Saturday Club, 1870-1920* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1927): 269.

(8) Truth Dexter, 181.

(9) Ibid., 183.

述が、以前にフェノロサとリジーがよく話した内容そのものであるということである。

リジーの旧姓をフルネームで言うと、リジー・グッドフュー・ミレット (Lizzie Goodhue Millett) となる。ミレットにせよ、また母の旧姓をミドルネームにしたグッドフューにせよ、明らかにリジーの主張 (として先の記事で紹介されたもの) とは一致せず、また私の調べた限り、リジーの祖父母まで遡ってもピッカリングとの血縁を示す証拠は見当たらない。したがって は事実関係として明らかに誤っており、また についても、リジーがフェノロサと結婚していた時の会話の内容に基づく主張である以上、結局のところ第三者には真偽が証明不能な話にとどまる。

したがってリジーの唱える「合作」説は、ピッカリングの出所という点では信憑性を欠く、と断定してしまいたいのだが、ただし『トゥルース・デクスター』で使用されたピッカリングという名前が、本当にフェノロサの口から出たものではなかったかと問われれば、私には多少の疑問が残る。ティモシー・ピッカリング (Timothy PICKERING, 1745-1829) は、アメリカ建国期に活躍したセーラム生まれの有力政治家であり、またピッカリング一族も、その歴史を植民地時代まで遡る、同地では比較的古い家柄であった。したがってセーラムで生まれ育ったフェノロサにとって、この名はそれなり耳に馴染んだものではなかっただろうか。

一方で南部に生まれ育ったメアリが、この名前を自分で思いついて作中で用いたというのは、やや無理のある想定かもしれない。ピッカリングという名前がフェノロサ発案であるという可能性は、資料的に証明することはできないにせよ、私としては否定しきれない感じもしている。

「合作」の証拠(3)：フェノロサ特有の表現

リジーによれば、『トゥルース・デクスター』の中に見られる“An imbricate roof of Japanese Ivy” (ただし『トゥルース・デクスター』の該

当部分は、“roof”ではなく“woof”となっているので、記者またはリジーの引用ミス、あるいは誤植であろう) や“Bryan’s Tatterdemalion Legions”などの表現は、かつて夫であったフェノロサに特有の表現であるという。また作中に現れた色鮮やかな濡れた小石をめぐる描写は、外出の際に石ころを拾い集めてポケットに入れて帰ってくるフェノロサの習慣を想起させるものだと、リジーは述べている。

前段落に挙げた2つの表現が、はたしてフェノロサの“stock phrases”の一部だったのか否かについて最終的な結論を下すためには、手稿を含むフェノロサの全著作を詳細に検討していく必要があるが、ここで私の暫定的な見解を述べておけば、彼の代表的な著作である *Epochs of Chinese and Japanese Art* (1912年) と、詩集 *East and West: The Discovery of America, and Other Poems* (1893年) を照らし合わせた限りでは、同一あるいは類似の表現を発見することはできなかった。したがって今の段階では、これらの表現がフェノロサ特有のものと断じる根拠はなく、この点についてのリジーの主張は裏付けを欠くと言わざるを得ない。

では次の問題である、小石の描写についてはどうだろうか。『トゥルース・デクスター』で該当するのは、クレイグヘッドが朝起き抜けに一泳ぎした後、ポンカタック島を散策する以下の場面である。

After the swim, his new energy spurred him to a walk inland, a scramble over crags, and a race, in ten-league strides, down the farther slopes of the cool sand-dunes, until he found himself again beside the water. With a boyish instinct, he stooped to pick up the wet pebbles that the sea kept tossing at his feet. Where were the reefs of amethyst and porphyry from whose crown these brilliants had been

torn? He could not guess; but their jealous tints, alive under the glaze of their native medium, faded in his hands to common chalk.<sup>(10)</sup>

引用部の最後の一文が、“They are dead in my hand, but just imagine an entire beach of them.”という(リジーの伝える)フェノロサの発言と照応しているように聞こえなくもないが、これだけでは断定しようもない。リジーの述べるように、フェノロサが外出時にしばしば石ころを拾い、持って帰って来ていたというのが本当だとしても、彼のそうした性癖が上の引用部分に反映していると解釈するのは、客観的に見て深読み過ぎると言わねばならない。

#### 「合作」の証拠(4): 「三国同盟」の話

リジーの証言においてフェノロサの「お気に入り(hobby)」とされた、三国同盟(the triple alliance)をめぐる会話は、クレイグヘッドとオーキッド、オーキッドの夫でクレイグヘッドの友人でもあるトマス・ウィリー、そして著名なイギリス人政治家のゲイロック卿の4名が、ポンカタック島にあるウィリーの別荘に滞在した、ある夏の夜の光景に現れる。

ヨーロッパにおける国際政治上の勢力均衡が失われた今、孤立を深めるイギリスにとって、極東での自身の将来的な権益を守るために同盟すべきは日本であると、クレイグヘッドはゲイロック卿に説く。1世紀もたたぬうちに、揚子江沿岸にはマンチェスターやピッツバーグ規模の、世界的な産業都市が出現するであろう。イギリスはこうした中国の経済的な大発展の可能性を見据えて先手を講じるべきだが、その際に脅威となるのはロシアである。ロシアは日清戦争後に三国干渉を主導して、日本に遼東半島を放棄させた。ロシアが当座狙っているのは旅順であり、同地までシベリア

鉄道を通した後、満州全土の獲得へと動くであろう。ロシアが満州を握れば中国は著しく弱体化し、ロシアの勢力が拡大するにつれて、イギリスを含む他国は中国での経済利権から締め出されることになるかもしれない。したがってイギリスが極東でのロシアの南下を抑えるには、まず日本を味方につけることが不可欠である——以上がクレイグヘッドの主張の要旨であるが、興味深いのはクレイグヘッドの主張を受けて、オーキッドが以下のように発言している部分である。

All this is of England, and Russia, and the East. But what of us, what of America? Are not our interests identical with those of England? And if England hesitates, shall we, too, be lost? No, I cannot believe it! England must rouse herself. I pin my faith to the Anglo-Saxon alliance. And now I see that Japan must be included. Japan is the lithe, sleepless dragon that fate has sent to keep guard over the enchanted kingdom of China.<sup>(11)</sup>

『トゥルース・デクスター』の前書きには、同書の内容が1897年にはだいたい固まっていたという記述が見られる。<sup>(12)</sup>そして翌年の1898年に、夫フェノロサは「東西両洋の来るべき融合(“The Coming Fusion of East and West”)」と題する論説を発表しているが、ここでフェノロサは「アングロ・サクソン同盟」に対する日本の立場、ならびに日中関係の現状について、以下のように説明している。

The pivot...is Japan. Her calm independence is phenomenal.... To-day she is willing

(10) Ibid., 194-195.

(11) Ibid., 208.

(12) 該当部分の原文は以下のとおりである。“The novel, ‘Truth Dexter,’ was composed substantially as at present published, during the year 1897.”

to join an Anglo-Saxon alliance...she goes on promulgating new treaties, codes, and tariffs, preparing to enter on terms of equality the status of her possible allies. She is reforming her system of education, and straining every term of the treaties to accommodate the introduction of foreign capital. It is utterly impossible in the future that she should swerve into an uncosmopolitan course. On the other hand, her responsibility to mediate in China's coming enlightenment has led to new and more hopeful zeal. Perhaps it was well that Japan could not essay to be China's savior while her armies were at the gates of the Gulf. Her subsequent campaign has been one of peaceful persuasion. Her representatives at Peking are selected for their sympathy with the mother civilization.<sup>(13)</sup>

アングロ サクソン同盟への日本の参加という点、そして中国を保護し啓蒙していく役割を日本に認めているという2つの点で、『トゥルース・デクスター』と「東西両洋の来るべき融合」の議論は共通している。ただし同じ論調でありながらも、フェノロサの方がメアリより詳しい内容を語っていることから見れば、こうした議論はメアリの創案であるというよりは、やはり文明批評家としてのフェノロサの視点を反映したものと考える方が自然だろう。「東西両洋の来るべき融合」を執筆したフェノロサがネタ元となり、持論をクレイグヘッドやオーキッドの口から語らせたという可能性は、おおいにありそうな感じがする。

さらに言えば、『トゥルース・デクスター』の原稿の推敲を進めていた時期のメアリの日記には、“Finished copying all the part Ernest had writ-

ten into the second part of novel.”との記述が見られる。<sup>(14)</sup> フェノロサの書き込みが具体的にどのようなものであったかを示す資料は存在しないが、上述の三国同盟をめぐる会話が『トゥルース・デクスター』の中盤に現れていることから見ても、“the second part of novel”と表記された部分にフェノロサの持論が組み入れられたというのは、確かにあり得る話であろう。

### リジーの主張の信憑性

以上、「合作」をめぐる先妻リジーの指摘を、『トゥルース・デクスター』の内容と合わせつつ、4点に分けて紹介してみたが、ここでのリジーの言い分は、はたして信用するに足るものなのであろうか。

(1) については、ポンカタック島のモデルが実はタッカーナック島であり、したがってその描写がフェノロサを情報源としたということも、あって不思議ではないだろう（ただし先に述べたように、私はフェノロサがタッカーナック島やビゲローの別荘を訪れたことを示す記録や文献を、今のところ発見していない）。また(2)についても、ピッカリングという姓とリジーとの関係をめぐって若干の事実誤認があるものの、彼女が前夫フェノロサから聞いた光景とともに、ピッカリングの名が現れているという点を考えてみれば、フェノロサの口から出た話が、『トゥルース・デクスター』に多少なりとも用いられている可能性は、完全に否定できるものでもあるまい。

ただし(1)と(2)ともに、第三者にも明らかな形での客観的な証拠を欠いた主張であることも、また事実である。上に引用した記事の中で、フェノロサがリジーに語ったとされる内容は、直接にはリジーのみが知り得るものであり、したがってフェノロサが本当にそんなことを言ったのか否かも、他の人々には当然ながら検証不能である。

(13) Ernest F. Fenollosa, “The Coming Fusion of East and West,” *Harper's New Monthly Magazine*, December 1898, 119-120.

(14) Mary Fenollosa's diary, 3 January 1899. Museum of Mobile, Ala.



また確証がないという点では、(3)も同様である。フェノロサの身近にいた者ならば、彼の表現や習慣に関するリジーの発言の真偽をあるいは判別できるのかもしれないが、例えばフェノロサの著作に類似の表現があるといった確固とした論拠を、リジーの側で提示できていない以上、信憑性の次元では薄弱な議論にとどまっていると言わざるを得ない。要するに、「元の女房が言ってるんだから、まあそうなのかもしれない」という程度以上に、リジーの発言をまじめに受け取るとは、第三者にとっては無理な話なのである。

(4)については、「東西両洋の来るべき融合」との内容比較ならびにメアリの日記の記述から判断して、当時のフェノロサの言論の影響が色濃く出た部分であるとは、いちおう言えるであろう。ただしリジーの述べるように、三国同盟をめぐる話題がフェノロサの「お気に入り」だったとするならば、彼がそうした話題について、2番目の妻メアリに対しても頻繁に語ったことは想像に難くない。夫婦の間でよく出る(読者にとってはちょっと新奇で、また知的な洗練を感じさせる)話を、メアリが物語のエンリッチメントのために少々用いたというのは、可能性としては十分あり得る話ではないのか。何にせよ、ここでの三国同盟の話がおそらくフェノロサの発案だとは推定できる一方で、それを小説の筋の中へと有機的に取り込んだのが彼ではなくメアリであったという事実は動かさない。フェノロサが自身のアイデアを己の筆で物語の一部へと実際にアレンジしたという確たる証拠がなくては、『トゥルース・デクスター』全体を両者の「合作」だと断じるには相当の無理があると、私は思う。

### 「合作」説の拡散と反論

しかしながら、「合作」説が確固とした根拠を欠く推測の域を出ないものであった一方で、メアリの作品(の多くの部分)が実は夫フェノロサによって書かれているという風評は、当時の読者の間に拡散していったように見受けられる。例えば

1906年4月号の『クリティックス』には、以下のような記事が掲載されている。

A well informed reader of THE CRITIC living in New York writes: People here don't seem to know what in Boston is no secret, as I take it, that "Sidney McCall" is Mr. and Mrs. (second) Ernest Fenollosa. He would naturally be able to write about Japan. He (she-they!) wrote "Truth Dexter" and "The Breath of the Gods," which is an Americo-Japanese story.<sup>(15)</sup>

「ニューヨーク在住の消息通の読者」が上の引用で語るところによれば、S・マコールがフェノロサ夫妻であると、すっかり断定されている。この記事が現れる前年の1905年には、彼女は自身にとって最大のヒット作となる『竜の絵師』の原型を書き上げており、先に触れたように同作品は『コリアー』の短編コンテストで入賞を果たしている。したがって、文筆家として自身をさらに売りだしていこうとしていたメアリにとって、「実は夫がゴースト・ライターだった」という類の風評は、自身の名誉のみならず将来の可能性をも傷つけかねないものであった。

またメアリの作品の版元であるリトル・ブラウン社にとっても、状況は憂慮すべきものであったと考えられる。メアリは多作の人ではないにせよ、彼女がS・マコールの名で出した『トゥルース・デクスター』と『神々の息吹』の2作品は、すでに世間で好評を得ていたわけであり、ここでコンテスト入賞作である『竜の絵師』を出版し、また男性作家とされていたマコールが、実はメアリであったという告知を合わせておこなえば、販売促進という点からも極めてオイシイ展開が狙えたはずである。実際、マコールの正体がメアリだと明かされた直後に『竜の絵師』は出版され、同作品

(15) "The Lounger," *The Critic*, April 1906.

はその後1年ほど、リトル・ブラウン社の目玉商品の一つとなっていく。

要するにメアリ個人にとっても版元にとっても、「合作」の風評は何としても排除されなければならないものであった。マコールがフェノロサ夫妻だという説に対して、例えば『クリティックス』1906年6月号では、以下のような反論がなされている。

By the way, if Boston believes that Mr. and Mrs. Ernest Fenollosa are “Sidney McCall,” Boston has overshot the mark for once. The true identity of “Sidney McCall” will, if the present plan is carried out, be revealed about next Christmas time. I have this on authority of one whose name you would recognize if I felt at liberty to mention it.<sup>(16)</sup>

ここでの情報源は某著名人とされているが、「現在の計画どおりに進めば、『シドニー・マコール』の正体はクリスマス頃に明かされる予定である」と明言できるのは、結局のところ「計画」の作成に携わったメアリ本人か、もしくは版元関係者であっただろう。先に述べたように『竜の絵師』の出版はこの年の10月であり、その直後に真の筆者が名乗りをあげるというのは、作家メアリのプロモーション戦略として十分あり得る展開である。あるいはクリスマス頃に予定されていた同書の出版が、若干早まって実際は10月になってしまったというのも、可能性としては考えられるかもしれない。

いずれにせよ、『竜の絵師』の出版に先立ち、その筆者に対して一般読者の興味が高まることは好都合であった一方で、もしそうした興味が悪評に転じ、作家としてのメアリのオリジナリティが疑われてしまえば、これは元も子もない事態とな

る。したがって「合作」説への反論は、各所で繰り返しておこなわれなければならなかったわけである。

### マコール = フェノロサの疑い

しかしながら、世間は本当にシドニー・マコールをフェノロサ夫妻だと疑っていたのだろうか。先に引用したとおり、先妻のリジーは“collaboration”という言葉を用いてはいたものの、彼女が実質的に主張していたのは、マコールの正体がメアリではなくフェノロサだということであった。要するに合作は合作でも、フェノロサが主でメアリが従という形の、いわばカッコ付きの「合作」であったわけだが、噂というものは往々にして、悪意のある方が広がりやすいものである。してみればこの種の「合作」説も、やはり読者の間でそれなりに拡散していたと想定できるのではないだろうか。

この点を考えるにあたって一つの手がかりとなる資料を、以下2つほど引用する。最初は『ニューヨーク・タイムズ』(1906年9月15日号)に掲載された記事である。そこでは夫フェノロサの経歴が、日本との関わりと合わせて簡単に述べられており、その後以下のような、「合作」の可能性をマイルドに否定した記述が現れている。

His own Japanese work, with the exception of occasional poems, has been general criticism and philosophy, and although his stores of knowledge have been at Mrs. Fenollosa's disposal, and his criticism has been given when desired, he has in no sense collaborated with her.<sup>(17)</sup>

上と同じ趣旨の主張は、『オールバニー・ロー・ジャーナル』1906年9月号に掲載された、『竜の

(16) “The Lounger,” *The Critic*, June 1906.

(17) “Boston Notes. Mary McNeill Fenollosa Identified as Sidney McCall in Her New Book, ‘The Dragon Painter,’” *New York Times*, 15 September 1906.

絵師』の書評にも見られる。冒頭でマコールがメアリの仮名であったと伝えた後、書評の筆者は「合作」説をこのように否定している。

In the uncertainty regarding “Sidney McCall” it has been conjectured...that. Mr. Fenollosa might be either the sole or joint author. It may be said here that Mr. Fenollosa has never collaborated in any of his wife’s stories, though she acknowledges her indebtedness to him for encouragement, criticism, and wide range of information.<sup>(18)</sup>

やっぱりと言うか、世間に広まっていたのは「合作」説にとどまらず、実はマコールの正体が「フェノロサ氏」ではないかと巷間噂されていたことも、上記2つの記事の内容から看取できる。

『トゥルース・デクスター』はともかく、『神々の息吹』や『竜の絵師』は日本に素材の多くをとったことが明らかな作品であり、もしメアリがマコールの仮名でこれらの作品を物したとするなら、そこには日本をめぐって豊富な知識と体験を持つ夫フェノロサの助言が入っていても、不思議ではなからう。いや、もっと踏み込んで想像すれば、夫婦で一緒に書いているということも、十分あり得るのではないか。さらに先妻リジーのように、いささか皮肉な視線をもってマコールの成功を見る者の中には、「『合作』と言いながらも実質的な作者はダンナさんじゃないの」という類の、一種の邪推にまで至った読者も当然いたことだろう。

### 「合作」説の根絶

『竜の絵師』の出版とともに、メア리를小説家としてさらに売り出そうとするに際して、シドニー・マコールの正体がメアリであると公表するこの夕

イミングでこそ、上記のような悪評の芽は完全に摘んでおかねばならなかった。メアリの作品の版元であるリトル・ブラウン社が、この問題に関して相当の神経を使っていたことは、『ニューヨーク・タイムズ』1906年9月11日号に掲載された、以下の記事から窺える。

The identity of “Sydney McCall,” author of “Truth Dexter” and “The Breath of the Gods,” was made known yesterday in a publisher’s announcement. “Sydney McCall” is Mrs. Mary McNeil Fenollosa, a native of Alabama who has spent some years in Japan. A few acquaintances had guessed previously that Prof. Ernest Fenollosa, her husband, might be a collaborator of the author of the Japanese novel. It is announced, though, that there was no collaboration.

The publisher’s announcement containing the information about the novelist also says that a new book by her, called “The Dragon Painter,” will be published next month.<sup>(19)</sup>

来月の新刊『竜の絵師』に先立ち、版元が「合作」説の打ち消しに躍りとなっている様子が、よく分かる内容である。版元によるきっぱりとした否定は、「合作」の噂の根絶へとつながったように見える。『竜の絵師』は出版以降、1906年末から1907年を通じて、リトル・ブラウン社にとってのスマッシュ・ヒットとなり、これによって小説家としてのメアリの名も、ひろく人口に膾炙するに至る。その後の新聞・雑誌記事を追ってみても、「合作」説が再浮上した形跡はない。

(18) “Literary Notes,” *The Albany Law Journal; A Weekly Record of the Law and the Lawyers*, September 1906.

(19) “‘SYDNEY McCALL’ A WOMAN. Author of ‘Truth Dexter’ Is Mrs. Mary McNeil Fenollosa,” *New York Times*, 11 September 1906.

## まとめ

フェノロサの先妻リジーを火元とした、小説家メアリのアイデンティティとオリジナリティをめぐる「合作」疑惑は、一応こうして終息したように見える。『トゥルース・デクスター』以降の作家としてのメアリの活動から見て、彼女自身に一定の文学的才能があったことは、それなりに認められなければなるまい。けれども彼女の物したこれらの作品が、彼女のみの力でヒット作となり得たかと問われれば、私には若干の疑問が残る。メアリの作品は夫フェノロサとの「合作」ではなかったにせよ、もしフェノロサと出会わなければ、作家メアリは世に出るまでには至らなかったのではないだろうか。

上記のような感想は、べつに私固有のものではない。例えばフェノロサ夫妻と親しかったアン・ダイヤーは、メアリの文才を開花させるにあたって夫フェノロサが果たした役割を、以下のように指摘している。

It would be unfair to speak of Mrs. Fenollosa's literary achievements without also speaking of the admirable quality of encouragement, of constant aid and stimulus given her by Prof. Fenollosa: a fact that none is so quick and so grateful to acknowledge as herself. A remarkable community of aim and thought has been the fertile soil in which Mrs. Fenollosa's gifts of mind and temperament have quickened and been brought to fruition. As she is still a young woman, having scarcely yet reached the high noon of life, we may confidently expect that her work so far is but the brilliant promise of what is yet to come; and that the South is to be enriched by works from her pen of an even more ripened and brilliant power.<sup>(20)</sup>

メアリが「いまだ若く、人生の最盛期にはまだまだ至っていない」これからの人であると、ダイヤーは述べている。しかしメアリの作家としての旬は、実のところ『竜の絵師』の成功までで終わっていた。夫フェノロサは1908年に死去するが、彼の死後もメアリは本名あるいはシドニー・マコールの名で活動を続ける。しかしながらメアリは『竜の絵師』ほどのヒット作にはついに恵まれず、1910年代後半には徐々に文壇から消えていき、ついに筆を折るに至った。

フェノロサ死後の作家メアリの歩みを見れば、彼女にとってフェノロサの存在は、ダイヤーが上の引用で言う「激励と援助と刺激」を超えた、何かしらそれ以上のものであったとも思える。メアリは筆を折るに際して、“I was written out.”という印象的な言葉を残している。<sup>(21)</sup> フェノロサの先妻リジーの唱えるような「合作」説は、結局のところ証明不能の憶測にとどまらざるを得ない一方で、メアリがその文才を開花させるに際して、フェノロサは(単なるネタ元といった意味以上の)少なくとも触媒の如き役割を果たしたようにも感じられる。彼が与えたとされる「激励と援助と刺激」の中には、メアリが優れた創作を継続していくための、何かしら必須の材料が含まれていたことは、やはり真実ではなからうか。このように考えてみると、作家として世に出たメアリの存在自体が、あるいはフェノロサによる一つの作品であったかとも、私には思えてならないのである。

(20) Anne H. Dyer, "Mary McNeil Fenollosa," *Library of Southern Literature*, Vol. 4 (Atlanta: Martin and Hoyt Company, 1909): 1594.

(21) Caldwell Delaney, "Mary McNeil Fenollosa, an Alabama Woman of Letters," *The Alabama Review: A Quarterly Journal of Alabama History*, July 1963, 172.

## **Was *Truth Dexter* a “Collaborated” Work?: Mary M. Fenollosa, Ernest F. Fenollosa, and the Question of Authorship**

Yutaka ITO

(Associate Professor, European & American Cultures, Cultural Systems Course)

Today, few people know the name of Mary McNeil FENOLLOSA (1865-1954) as a popular writer in early 20th-century America. Her first novel *Truth Dexter* (1901) achieved considerable sales; her third novel *The Dragon Painter* (1906) was a bestseller in its time. By 1907 Mary emerged as a budding novelist and enjoyed remarkably wide literary popularity.

However, the heyday of Mary’s writing career did not last long. During the early and mid 1910s she continued to write and publish, but none of her novels were commercially successful. Mary retired from novel writing in the late 1910s. Since then, her works have mostly been forgotten except among a small number of readers and literary scholars. In American literary history, the name of Mary Fenollosa is recorded at best as a once popular, but more or less mediocre, novelist.

Rather than as a novelist, Mary may now be remembered as the second wife of Ernest Francisco FENOLLOSA (1853-1908), who was a noted authority on Far Eastern art and also an Orient-minded cultural critic in America at the turn of the 20th century. While Mary herself acknowledged an intellectual debt to her talented husband, their marriage sometimes functioned to blacken her good literary name; there was an occasional rumor that Mary wrote her novels not on her own but in close collaboration with Ernest.

The purpose of this article is to examine whether or not the authorship of Mary Fenollosa was a “collaborated” one, and if so, to what extent. My primary focus is on her first novel *Truth Dexter*. By closely analyzing Mary’s original text and other related material, I claim that such a rumor, if not completely groundless, should certainly be dismissed as ill-intentioned defamatory discourse.